

第三章 本店の再建

一 昭和別館の修築

GHQの本拠に、日比谷の第一生命保険相互館が選定され、同社がその本館を立ち退かざるを得なくなったため、当社が疎開後借用していた同社の京橋ビルの一部を返却せざるを得なくなった。

しかし、東京の被災が余りにも大きかったため、他に適当な移転先も見付けられなかったので、差し当り四階の一室を撤去して、同館の一階に集結した。

そこで、当社としては当社所有の被災建物のうち、若干の修繕で使用し得るものの存否を検討した結果、昭和別館（現第二丸善ビル）が、内部が焼けて了っているに拘わらず、外廓が完全に残っていることを確かめ、同別館を修復して、一時を凌ぐほかないとの考に達した。

かくて、まず、昭和別館を改造することとなり、清水建設の請負で、昭和二十一年一月二十六日から工事を始め、翌二十二年二月二十日、満一カ年余を費やして改修を終った。意外に長い時日を費やしたのは、焼跡の整理に手数を要した上、特に諸資材の欠乏と輸送難その他多くの障碍に遭い、しかも資材の獲得は意の如くならず、作業は屢々停頓したためで、建設上の苦勞は深刻なものであった。この建物は、外壁は無筋コンクリート造・木造二階建、

延面積七八八・一七平方メートル（二三八・四二坪）であった。

そこで、第一生命の京橋ビルには本店小売部のみを残して、他は全部昭和別館に移り、二月二十八日までに概ね整理を完了してここを本社として業務を開始した。而して一階には文具・洋品・和書及発送の各課、二階には重役室、調査部、総務部、経理部及洋書課が配置された。

而して小売部は前述のように京橋ビルに残し、これに神田支店、丸ビル売店を合せて東京支店に昇格した。

二 日本橋本店の仮建築

日本橋通りの本店建物は、既述のように、空襲で全焼したまゝになっていたので、昭和別館の応急再建築が終ると、その月から本店新築工事に着手して、昭和二十二年七月十二日上棟式を挙げた。式場にはこの工事請負者清水康雄清水建設社長以下工事関係者十数名、当社からは重役及金沢末吉、その他部長以上が参列して、神式で荘嚴な雰囲気包まれて式を終った。

のちに司 忠現会長自らこの建築の経緯を語っているように、いろいろの隘路が錯綜していた。何しろ、終戦後日も浅く、建築資材の調達困難、折角整えた資材の輸送難は想像を超えたばかりでなく、その上廢頹気分が横溢している当時の一般情勢を反映して作業予定が思うように進まず、建築主任始め監督者の焦慮と苦心は他の想像を許さぬものがあった。しかし漸く同年十二月四日屋内作業が略々完了したので、尚作業を継続しながら未完成のまま京橋の東京支店をここに移し翌五日から営業を開始した。この日は午後三時から工事関係者を始め、本社在勤者全

員出席して、神式で落成式を行い、引続いて夕刻から新築社屋の階上で、来賓及本社の部長以上が列席して、簡素な祝宴を開いた。

この木造の本店社屋建築については司 忠現会長自ら次のように述懐している。

本社建設の大役を引き受けると、私はすぐ清水建設へ飛んで行って懇意にしていた当時の小笹専務に会った。話を切り出したところ、とんでもないと頭から一蹴されてしまった。木材の切れ端一つない始末だから、半ぐらいはどうにもこうにも動きがとれない状態なのだと言う。「木材を提供したら建てるか」ときくと「それなら建てる」ということだった。「はかにいるものは」「クギがほしい」というので「では木材とクギは私のほうで出そう」ということで話が決った。

私がそんなタンカを切ったのは、実はそれなりの目算があつたことだった。戦争中軍需工場をやっていた関係で、荷造り材料用に木材七百石の配給があつたが、とらずじまいでまだその切符が置いてあつた。そこで、それを土台にして用材を買い集めてやろうと思いついたのである。

ところが、切符はあつてもカネはなかつた。会社の金庫を調べさせたが、いくらもない。私はまず自分の預金五万円をはたき、他の重役十人にも呼びかけて二万円、三万円と出してもらつた。二十七万円集まつたところでそれをふところにして新潟へ走つた。まだ統制は解除されていなかったから、表向きは買えないのだが、県の林務課長や材木屋がいろいろ親切に相談に乗ってくれた。

木材といっても本屋の場合は普通の建築用材とは異なる。特にハリ材などはものすごい本の重量に耐えなけ



木造二階建日本橋本店（昭和22年12月竣工）

ればならないので、六、七寸幅の一尺七寸ものでないと役には立たない。それには末口が二尺二寸のものでないと製材できないのである。戦争中切りたおしていたのでこのぐらいの太さのものはそんなにあるわけはなく、一本買いたいということになる。それも運搬のしやすい場所のものをといたのでずいぶんさがしまわった。当時はトラックは皆無であつた。

弥彦神社で知られる弥彦でまず松材を百本ほど買い、そのあと羽越線の岩船町という駅まで出かけた。そしてそこから村上市まで立ち木をさがしながら山道を三里も歩いた。十二月にはいついていて積雪は五尺を越えていた。腰まで埋まる雪のなかをはいずりまわった山歩きの苦しさはとても口ではつくせない。宿について一杯ひっかけてやっと生き返ったここちになった。翌日はさらに村上から三面川をのぼって奥三面にはいり、方々で適材をさがしては買った。最初は石四十五円ぐらいから最後は七十五円まで、合計し

て一万二千石ほど買い付けた。

買い付けが終わると、つぎは伐採と製材だ。奥三面のものは伐採しておいて雪どけを待ち、いかだに組んで村上まで流して製材所へ運んだ。製材もはじめのころ一時間当たり七円の賃挽き料がまたたくまに十六円、二十円に値上がりしておどろかされた。東京へ運ぶときも貨車がとれないので苦勞した。そのようにして全部集め、東京につくまでの価格を計算してみると石当たり九十五円であがった。そのころ東京では石三百五十円だったから、苦勞しただけの代金はあったというものである。

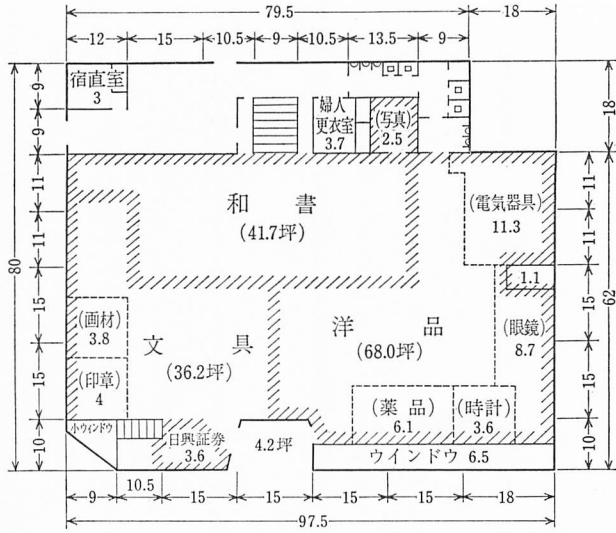
この木材で二十二年二月、昭和通りに二百四十坪の建物を建てて本拠を移した。そのすぐあとで本店あとも強制疎開が解除された。昔売り場の建物が二百八坪だったので、同じ坪数のものをすぐ建てようとしたが、当時建築制限がうるさくて許可されなかった。そこで私は丸善の特殊性を説いて建設省にお百度を踏んだ。この結果、特殊許可ということでやっと認められ、その年の十二月、二階建四百十六坪の本店売り場を新築することができた。

その本店を建てるときも、資金がじゅうぶんでないとか、時期尚早だという反対意見が重役や社員にまであつたが私はそれを押し切って建築を強行した。できてしまえばみんなよろこんでくれた。完成の三カ月前に私は社長に就任していたので、この木造の本店が落成したとき一階広場に社員を集めて訓示した。(日本経済

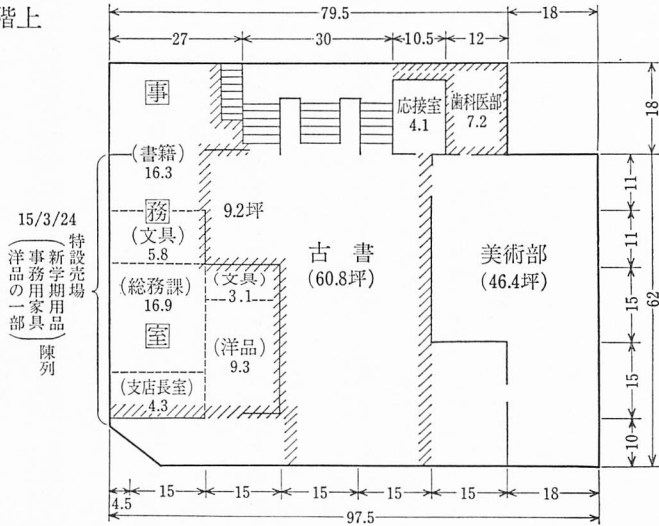
新聞社編「私の履歴書」一三七一)

あの敗戦に打ちひしがれている時、これだけの活動を為し得る人が、そうなかった筈である。

階下



階上



日本橋本店 平面図 (昭和22年12月竣工) 単位 尺

さて、どうにか出来上って了うと、早速と御得意の方々に次のような案内状を出した。

日本橋の丸善として多年御虫員を賜って居りました弊社も暫く京橋に仮営業を致し皆様方に種々御不便をお掛けして居りましたが、このたび旧の処に新築落成致しましたので十二月五日同所へ引移り開店致すことに相成りました。

これを機会に従来の扱品―和洋書籍・文具・洋品―を一層充実致します他、薬品・時計・眼鏡・印判等新種目を加へ、更に催しものとしては常設画廊、古書籍展を開設、広く皆様の御需要御觀賞に供へ前々の御愛顧にお応へ申上げ度いと存じて居ります。茲に社屋落成の御案内旁々倍旧の御引立を御願ひ申上げる次第で御座います。

この建物は木造二階建延面積一、三六五・六三平方メートル（四一三・一坪）であった。前にふれたように、當時は甚だしい物資難の折柄で一般建築はいうまでもなく商店としてもその建坪は極度に制限されていたので、この建築は特別許可に依る店舗であった。一階には洋品・文具・和洋書のほか眼鏡・時計・電気器具・薬品・印章・洋画材料の売場、二階には古書の売場及事務室のほか画廊を設けた。

三 開店記念——丸善美術部の開設

前述のように、本店の建築が落成、京橋の仮営業所を引払い、東京支店として本拠に業務を移すに当り、その記

念として「丸善美術部」を開設することにした。当時、社長は、関係各方面に送った挨拶状のうち

……復興途上にある首都に、文化国日本再建の一翼を担って、微力乍ら美術文化昂揚に資し度く、今般丸善再築とともに同所内に「丸善美術部」を開設致しました。

文教の意味からは会場芸術の隆昌は不可欠で御座いますが、家庭芸術も亦重要と存じ、内はわれ／＼同胞の情操陶冶に寄与致し度き存念は勿論、広く海外人の鑑賞にも供することにより、日本文化の持つ精神的深度の対外的浸潤を希求仕る次第……

と述べている。

社長は、天性芸術の愛好家であった。名古屋支店長時代、中京美術界の不振を遺憾として、その振興に尽くした。このことは、在中京芸術家が頗る徳とするところとなっている。また東京に於ても、戦後、松方コレクションの日本への返還、国立西洋美術館・国立近代美術館増改築資金の募集等に非常に努力したことは、周知のごとくである。そのような資質と過去の経験から、右のように丸善美術部の設置を断行した。そして社自ら主催した展覧会が梟会であった。

四 最初の梟会展覧会

丸善美術部設置が伝わると、全都の被災建物の回復もまだ殆んど進んでいなかった頃であったので、この計画は画壇でも歓迎してくれた。そしてまず日本画壇から申込があった。当社としては、後述のような計画を進めていた

ところであつたが、順序を変更して開店記念として「新作日本画展」を昭和二十二年十二月五日―十四日に開催した。

この記念展覧会に賛成出品して下さった方々は、左の通りで、当時日本画壇の耆宿ばかりであつた。

西山翠嶂 堂本印象 徳岡神泉 小野竹喬 奥村土牛 鏑木清方 上村松園 中村岳陵 山口蓬春 安田靱彦 前田青邨 福田平八郎 小林古径 菊池契月(イロハ順)

さて、当社が最初から企画していた洋画の展覧会の方は、尽力を辻永氏にお願いして、その年十一月前後から数回の会合を持ち、展覧会名を「臬会」とすること、会期を十二月十五日から二十日までに行ふことなどを定めて準備を進めていた。臬会の名は、当社のマークからとつたものである。

その開催に当つては、次のような案内状を各方面に出した。

臬会 第一回洋画展覧会御案内

臬会は帝国芸術員洋画の諸先生が当丸善の英字マークに因むで結ばれましたお集りで御座います。曩に日本橋本社の新築落成、画廊開設に伴い日本画壇諸權威の新作を展覧絶賛を博しましたが、之に引続き臬会の第一回展覧会を左記により開催いたしますので、是非御清鑑を仰ぎたくこゝに御案内申し上げます。

昭和二十二年十二月十日

而して、このときの作家と作品は次の如くである。

初冬の朝(伊豆山)	石井柏亭	薔薇図	山下新太郎
葡萄採る猿	和田三造	冬富士	小林萬吾
箱根秋景	辻永	La Statue de Flaubert, au jardin de la Place Denfert-Rochereau	有島生馬
秋	辻永		
嵐峽新緑	中沢弘光	瀬戸内風景	南薫造
舞妓	中沢弘光	漁村	須田国太郎

この会は、予期通り、非常な好評を得た。

続いて、第二回の準備をすすめ、第二回臈会は、昭和二十三年四月二十三日―三十日に開催した。出品者は石井柏亭、和田英作、辻永、中沢弘光、梅原龍三郎、山下新太郎、小杉放庵、有島生馬、南薫造、須田国太郎の諸氏であった。

臈会は、その後、毎年一回春(多くは五月下旬)を撰んで開催し、現在に至っている。

昭和三十六年五月二十二日から二十七日に至る六日間、本店三階画廊で開催した第十三回臈会によせて、創設の事情など述懐した一文を、「丸善ニュース」から抜萃しておこう。

(前略)、十年一と昔、と申しましたが、とくにこの会のできた昭和二十二年といえば、戦災の跡も未だ生々しく、世の中は「今日」を如何して生きようか、如何して食べてゆこうか……とただそれだけに親も子も、社長



辻 永 画 伯

も社員も、心を砕かねばならぬ時代でした。画家といえども、霞ばかり食って生きられません。高名の先生であればあるほど、つらい風当りの世の中でした。

昔から美術に大きく関心をお持ちだった司社長には、絵かきのご友人は沢山おありでしたが、中でも芸術院会員辻 永先生とはご親友の仲でした。

うるおいを失った世の中に高尚な美の眺めを呈しましょう、と「粟会」展覧会は、その第一歩から順調に、年を重ねるごとに世間の注目を深めてまいりました。

ここで、当社企画のもう一つの洋画展覧会葵会のことを記しておきたい。

その第一回展覧会は、昭和二十七年九月二十二日から二十七日まで、本店三階画廊で開催、以来昭和四十年十月第十四回展を最後に中止した洋画展覧会である。わが国洋画の最大開拓者である黒田清輝画伯の偉業を偲び、その門下の和田英作、和田三造、辻 永、中沢弘光、山下新太郎、白滝幾之助、中村研一の諸氏が中心になって毎年秋に開催した。